日本の近代化を促進するために、明治天皇は様々な国家産業を奨励されました。特に、それらの産業の技術振興に力を入れられました。酒の醸造産業もその1つです。この藁で巻かれた飾り樽は、明治神宮全国酒造敬神会に所属する全ての醸造所から、明治神宮に祀られている明治天皇と昭憲皇太后の御霊に深く敬意を表するものとして、毎年献納されています。中身が入っていない樽はボトルに入った酒とともに神に奉納されます。

酒は神道で重要な役割を持っています。酒は人と神との懸隔の橋渡しをする、一つの方法として考えられているからです。酒は日本語では通常「日本酒」として知られていますが、神社で使われる米酒の名前は「神酒（みき）」や「御神酒（おみき）」で、「神」と「酒」の文字を使って書かれます。御神酒は神に捧げるものとして一般的に使われており、さまざまな神社の儀式や大きなお祭りの際に信者に配られるのにも使われます。

明治神宮で見られる清酒とワインの対は明治時代の文化を象徴しています。明治天皇の努力により、外国からの影響を日本の伝統と組み合わせることはこの時代の重要な側面でした。